

中国における持続可能性日本語作文教育の試み

—学習者が考えを文章にしていくプロセスを中心に—

劉 娜*

The Potential of Japanese Language Education for Sustainability: A JFL Writing Course in China

LIU Na

abstract

This paper explores the potential of a JFL writing course in China based on the concept of Japanese language education for sustainability, which emphasizes the relationship between students and society and enables students to develop thinking skills while at the same time developing Japanese language competence in reading, writing, listening, and speaking. The students in the writing course wrote essays after reading various materials related to their own lives and then discussing them with their peers. The first drafts were examined through peer response activities and then revised based on the feedback obtained during the activities. This study qualitatively analyzed the first and second drafts by one student to examine how he expressed and organized his thoughts through this writing course, which had a quite new teaching approach in China. The result showed that he wrote about matters that he chose from the reading material and discussions among peers provided for the pre-writing activity, and that he could associate with himself. Moreover, during the peer response activities for his first draft, the student did not merely accept what his peers said, but discussed repeatedly about the content and confirmed some information by checking on the Internet before he completed the second draft.

Keywords : Japanese Language Education for Sustainability, pre-writing activity, group activities
native language, change in writing

1. 問題の所在

中国の大学における日本語専攻では、高学年になると作文という授業が設置されるようになる。この作文の授業は日本語母語話者教師によって担当されることが多い。授業の進め方としては次のような流れが一般的である。①教師が作文のテーマを提示し、その作文に使える既習の文型をクラス全体で確認する→②学習者が教師の指示に従って作文を書いて提出する→③教師は提出された作文を添削して学習者に返す。こうして書かれた作文に対して、「学生の書いた作文は幼稚なものが多く、大学生の頭を持っている学生たちが、小学生のような作文を書いてくる。」「学生の作文には、自分の考えがない」など問題点を指摘する声も少なくない（筆者によるインタビュー）。

キーワード：持続可能性日本語教育、事前準備、グループ活動、母語、作文の変化

*平成19年度生 比較社会文化学専攻

他方、学習者からみると、第二言語で自分の考えを表出することは難しいと言われることが多い。この難しさには、作文が4技能の中でも最も習得困難とされることや作文に当てられている授業時間が少ないことなど様々な問題が絡んでいると考えられるが、本稿では、主に作文指導上の問題として捉えることにする。そして、先に述べた作文指導法には以下に述べるように、二つの問題点があり、その結果として、教師には内容が幼稚とされ、学習者には考えの表出が困難とされるという事態が生み出されていると考える。

第一に、作文で取り扱う内容上の問題である。作文テーマとして、学習者の日本語のレベルを考慮し「携帯電話」、「私の夢」、「私の趣味」のような、それほど思考を必要としないものが多い。「携帯電話」、「私の夢」、「私の趣味」のようなテーマでは、大学生が持っている知識を取り込んだ内容豊かな作文とすることは難しいと考えられる。

第二に、作文を書く前の事前活動の問題である。作文の授業では、教師によって作文の題目が与えられ、その題目のもとに作文を書かされることが多い。事前活動があったとしても、それは、その題目で書くのに使えるような文型や語彙が与えられるぐらいである。このようなやり方が継続すると、学習者には、書きたいことを書くのではなく、自分の日本語の力で書けることを正しく書くのが作文だという作文学習観が形成されていくことは容易に想像できる。結果として、学習者は、作文という媒体を通して日本語の文型と語彙の練習に集中し、書く内容を自分の既有知識を活用して吟味することなどは軽視することになる。

以上、作文で取り扱われる内容においても、作文を書く過程においても、学習者が自分の考えを吟味する契機は極めて限定的であり、このことが「自分の考えの表出」を難しくしていることが窺われる。

そこで、本稿では、作文で取り扱うテーマを再考し学習者の考えが深められるものとし、作文を書く前の事前活動を導入して書く内容の吟味を促すことで、作文に「自分の考えの表出」が具現化されるかどうかを探ることにする。

2. 先行研究

作文の授業を考える際、なぜ「自分の考えの表出」が重要か。本稿では、技能習得に力点を置く専門学校ではなく、人格陶冶をも目標の一つにおく大学教育課程の中に作文の授業が位置づけられる点を踏まえて、思考を深め、表出する点を重視したい。

岡崎(2008)は、持続可能性日本語教育について述べる中で、言語教育は言語そのものを知識として極めるのではなく、学習者が生きていく中で自分の生き方を考えていく手立てとするためにあるものであると指摘している。このことは、作文教育もまた、「作文そのもの」、作文の中に含まれる言語の知識を極めるためではなく、学習者が自分の生活や、学業、仕事などの人間活動のあり方をよりよくするものとして行うべきであることを示唆する。学習者が、自分の人間活動とかけ離れた形で作文学習を行うのではなく、一体化したものとして捉えて作文学習ができるように、教師は、現行の作文授業の問題点を能動的に認識し、改善に向けた手立てを考える必要がある。

そこで、ここでは、まず、作文の中に含まれる言語の知識を極めることが目標とされていることから、文法も語彙も文章の構成も正しいが大学生の知的レベルを反映しているとは言えない作文を書く学習者が多いという問題を、言語生態学を援用して捉え返すことから始めたい。言語生態学では、言語使用を心理的領域と社会的領域の二つの領域で捉える。心理的領域とは、言語が思考を促し支えるものとして使用される領域であり、自己内対話や自問自答などがその例である。社会的領域とは、ある言語と、その言語がコミュニケーションの手段として機能する社会との間の相互交渉的関係の領域である。例えば、授業中の教師学習者間の会話や学習者同士の会話などである。それぞれの領域そして両者が相互交渉する領域において言語がうまく機能している場合、言語生態もそしてその言語の使用者の人間生態も十全なものとして保全されているとされる。

この言語生態学の枠組みから見ると、中国における従来の日本語作文教育が作り出す学習者の言語生態は保全されているとは言い難い。まず、作文を書く段階で、テーマに関わる自分の既有知識を活用して思考を深めながら自己内対話を繰り返し、その結果を言語化して文章に表出するという過程を踏んでいる学習は極めて少ない。先に見たように、多くの学習者は書けることを書き、自身の持つ既有能力は教師に提示された直近の文型と語彙

に限られていることが多い。つまり、心理的領域での言語使用が限定的であることが分かる。他方、社会的領域における言語使用は皆無であると言ってよい。書いたものを巡って他者との間で言語を使ってやり取りされることは殆どないからである。最後に心理的領域と社会的領域の間の相互交渉関係は、教師からのフィードバックにその可能性があるが、現実的には、学習者にとって、自分の書いた作文について他者からフィードバックを受け、それをもとに推敲し改稿することで、より深化した思考が言語化された結果として作文の質をさらに向上させるという経験はあまりない。

言語生態学を適用した実践研究は日本語教育の領域ではまだ緒に就いたばかりであるが、房(2011)や楊(2010)などはパイオニア的研究であると言える。房(2011)は、言語生態学を援用し、心理的領域と社会的領域での言語使用及び両領域間の相互交渉関係を促すことを軸におく日本語音声教育を持続可能性日本語音声教育と呼び提唱している。作文教育と音声教育では違いがあろうが、原理は参考にできると考え、以下で詳細に検討する。

房(2011)では、教室外での事前課題として発音日記を書く一人学習(心理的領域)と、その結果を持ち寄って仲間と発音の改善に向けて話し合う教室内でのピア学習(社会的領域)とを組み合わせる(両領域の相互交渉)教室実践が行われ、そこからデータを収集して分析した結果、①発音日記を書くことで、学習者は、自分の発音を身近なリソースを活用して捉え返しこれまでブラックボックスであった自身の発音過程を可視化することができたこと、②一人学習で得た様々の情報を持ち寄ることでピア学習でのやり取りが活発化し、発音の改善に向けて具体的な方法を仲間と一緒に考案したこと、③自分の力で音声学習を続ける確信が持つ生活のあり方も変化したことなどが得られたとして、一人学習とピア学習を組み合わせる持続可能性音声教育は学習者の言語生態・人間生態の保全につながるものであると結論づけている。

本稿では、この房の持続可能性音声教育の実践を参考にして作文活動をデザインして実践し、考えを表出する作文活動が達成できるかを探ることとした。房の持続可能性日本語音声教育に倣って、持続可能性日本語作文教育と呼ぶことにする。以下に実践の骨格を述べる。

[事前活動から第一稿へ]

事前活動(教室内)

- ①教師が作文テーマを提示し、そのテーマに関連する資料を配布する。学習者はその読み資料を各自で読む。
(心理的領域の言語使用を促す)
- ②資料を読み終わったら、読み資料から得た知識や情報、意見を持ち寄り、グループになって話し合う。(社会的領域の言語使用を促す)

第一稿を書く(心理的領域の言語使用)

課題として、教室外で第一稿を書く。

[事前活動から第二稿へ]

事前活動(教室内)

第一稿に対して、グループでお互いの作文を取り上げ、改稿に向けて話し合う。

(社会的領域の言語使用)

第二稿を書く(心理的領域の言語使用)

課題として、教室外で第二稿を書く。

「書く」ことは4技能のうちでも最もハードルが高いとされていることも考慮に入れ、上に示したように、学習者各々の心理的領域における言語使用を活性化させること、及びその結果をピア学習に持ち込むことで社会的領域における言語使用を活発化させることを二度繰り返すことを重視した。事前活動と作文を書くことをセットとして組み合わせることによって、学習者の心理的領域での言語使用と社会的領域での言語使用が相互交渉的に活発化され、作文過程を支えることが期待される。つまり、第一稿を書くときに、事前活動で行われたことが自己内対話として展開されることでテーマを巡る思考が深まり、それが第一稿として表出される。次に、この第一稿をめぐる、改善のための推敲をグループで行うことで、社会的領域における言語使用が活発化される。さら

にこのやり取りが第二稿を書く際のリソースとなり作文の改善に寄与することが予想される。事前活動としてのグループでの議論で使用される言語を母語とすることで、学習者は自分の既有能力にアクセスしやすくなることが期待される。

3. 本稿の目的と研究課題

本稿では、先に示した事前活動を組み込んだ作文指導法が、考えの表出が難しいという中国における日本語作文授業の抱える問題の改善となりうるか、その可能性を探ることを目的とする。この研究目的を達成するために、以下の研究課題を設けた。

課題：事前活動を組み合わせることで、学習者が考えを作文に表出することが促されるか。

4. 研究方法

4.1 調査対象者

本稿は、中国の某大学の日本語学科において、4か月間（2009年9～12月）行った作文クラスの活動（週に1回、90分）を研究対象とした。学習者は日本語を専攻とする大学3年生28名である。学習者の日本語能力や性格などを参考にして4人の学習者を一つのグループに編成した。全部で7つのグループができた。より多くの仲間と活動ができるように、学期中1回グループチェンジを行った。授業は、日本人教師Aの協力を得て、筆者とAの2人で行った。

分析対象は、第一稿から第二稿への変化が著しく、事前活動の顕著な影響が見られたと判断した周とした。周の第一稿から第二稿への改善は一目瞭然であり、周がその一員であるグループにおいては、教師（筆者と日本人教師A）の授業観察及び調査期間中のインタビューから、全員が活動に積極的に参加していると考えられたからである。周はクラスの中でも中位の日本語力を持ち、作文を書くのを苦手としていたが、活動が進むにつれ、その作文に大きな変化が見られるようになった。

4.2 作文のテーマ

1学期を通して、全部で6本の作文を完成した。作文教育は、学習者が自分の生活や、学業、仕事などの人間活動のあり方をよりよくするために行うべきであるという考えを踏まえて、作文のテーマを学習者にとって自身自身の生活や自分自身を取り巻く環境に引き付け、よりよく生きることと結び付けやすいと考えられるものにした。具体的には、①一人っ子政策と私；②中国の環境問題；③将来に向けてこれまでの大学生活を振り返る；④格差社会；⑤私にとって仕事とは；⑥最近のニュースから考えたことの6つとした。

4.3 データと分析方法

データは、①周の第一稿とその前の事前活動(グループでのやり取りと続いて行われた全体共有の時間でのやり取り)時の音声記録を文字化したものと②周の第二稿とその前の事前活動（グループでの第一稿をめぐる改稿のためのやり取り）時の音声記録を文字化したものとする。

分析方法は、事前活動でのやり取りと第一稿、第二稿との関係を談話分析の手法を援用して探る。分析方法の詳細は当該の箇所述べる。

5. 結果と考察

5.1 第一稿と事前活動との関係

事前活動で使う読み資料には、中国の環境問題の全体像が理解できる中国語の資料と、日本人によって日本語で書かれた中国で最も環境汚染が厳しい淮河の汚染状況のレポートを使った。これらの読み資料をめぐる、学習者は、各自で読んで自分なりに理解し意見を持ってグループでの話し合いに臨むように教示した。グループで

の話し合いでは、①身近にどんな環境問題があるか、②環境問題を意識した経験・きっかけ、③環境問題と経済発展の兼ね合いの3つの柱を立てて議論をすることを指示した。この教室内での事前活動を経て、宿題として教室外で周が書いた作文の第一稿を次に示す。

環境問題に対して私の感想

- ⁱ① 今の地球は泣いています。同じ時に地球は汗を流しています。
- ② オゾン層は有害気体に破壊されました。じゅもくも破壊されました。空気の中に二酸化炭素の含量がずっと増えています。これらこそは地球温暖化の原因です。
- ③ 温度が高くなったあと、たくさんの種類の動物や植物が絶滅しまいました。動物が好きな私はとても悲しいです。
- ④ 私の出身地は撫順です。だから私は撫順の環境問題がよく了解します。撫順にアジアの一番大きな露天的な鉱床があります。数十年の採掘のせいで、撫順の空気のなかに粉塵の含量が高いです。だからたくさん撫順の人は鼻炎と咽喉炎があります。撫順は重工業が発達の町で、鉱床があるのではなく、石油産業や発電所や鋳鋼工場もあります。十年前、撫順はピンクの雪が降ったことがあります。
- ⑤ 人間の不注意のせいで、環境は毎日ずつ悪くなってきます。「環境を破壊してから環境を回復します」人間はいつもこんなことをします。でも、なくなった動物と植物が帰ることは不可能です。
- ⑥ 技術は日々進歩している。しかしどんなに優れた技術であっても自然への影響を考へることなしには進められない。人間はつい技術のことを考へます。でも、自然を守ることを忘れまいしました。もし、人間は自然を破壊つづけている。ある日、自然はかならず崩れます。あの時人間は生活のところがなくなります。あの時「自然を守ろう」と呼べばことは遅いです。人間は後悔する機会もありません。
- ⑦ だから、どうしても自然を守ることが一番重要です。人間の未来のためです。【原文のまま】

周のこの第一稿は、文章構成という点から見ると、短い段落がそれほどの論理的関係なしに並べられ、論旨に一貫性が乏しいと言える。取り上げられている内容は故郷の環境汚染の実態を中心に身近にある環境啓発ポスターや読み資料から得られたと推測される情報で盛りだくさんである。この第一稿を書く時、事前活動は周の作文過程をどのように支えたのだろうか。グループでのやり取りとそれに引き続いて行われた全体共有の時間での学習者同士のやり取りの文字化資料をデータとして、そこで取り上げられた話題という点から検討する。

まず、周たちのグループで取り上げられた話題を調べた結果を表1として示す。

表1 グループBで取り上げられた話題ⁱⁱ

①環境破壊を阻止するための新しいエネルギーの開発の提言。例えば、原子力(周)
②資源不足の深刻さ ③学生寮での水道水の流しっぱなし現象 ④都会の騒音問題及びその解決方法
⑤ガラス張りの高層ビルの反射熱 ⑥高層ビルの電力浪費 ⑦伐採による生態系の破壊が進む黄土高原
⑧洗車場での水道水の無駄使い。

この表から分かるように、グループでの話し合いでは環境問題に関するたくさんの話題が取り上げられている。配布資料にはない話題も提起され詳細に議論されていた。周の提起による話題は表1の①である。しかし、これらのグループで取り上げられた話題は周の第一稿には直接的には反映されていない。次に、全体共有の時間に各グループから出された報告の中の話題を調べた。その結果を表2として示す。

表2 各グループからの報告で取り上げられていた主な話題

話題
グループメンバーの出身地—山東省済南市の水不足問題で、「泉の町」として有名だった済南市の天下一の趵突泉が湧き出なくなった問題の報告
各メンバーの出身地で起きた色々な環境問題の事例；環境問題と経済発展の兼ね合いが不可能なことについての見解；経済発達国の代表としてのアメリカの環境問題の解決に対する態度

三峡ダムのごみ問題
大連出身のメンバーによる「馬欄河の汚染管理」の成功事例の報告
走っている車の窓からティッシュを捨てる行為に見られる国民の環境意識の低さ；山西省出身のメンバーによる石炭の町－太原市の環境汚染の実態報告
地元大連の汚染された海を例に、地球温暖化が中国でも現実問題になっているという主張

各グループの議論では、多様な話題が話し合われているというだけでなく、話し合いへの向き合い方も多様なことが分かる。後者については、周のグループでは見られなかったく自分の故郷における環境問題をグループのメンバーに説明し共感を得るという関わり方が注目される。周の第一稿は先に見たように、短い段落が多い中で相対的に長くなっていたのは故郷の環境汚染問題を取り上げた段落であった。自分のグループの議論には出ていなかったが、他のグループでは盛んに語られていた故郷の環境問題からヒントを得て書いたことが窺われる。

以上まとめると、周は環境問題についての日ごろの見聞や意見などの既有知識、事前活動の中の読み資料で得られた情報、そして共有時間に出された「故郷の環境問題を紹介する」視点などをリソースとして第一稿を書いたことが分かる。

5.2 第二稿と事前活動との関係

続いて、グループで、仲間の第一稿の作文を取り上げ、改稿に向けての議論が行われ、この議論を参考にして、宿題として第二稿の作文を書いた。ここでは、事前活動としての改稿に向けてのグループでの議論が、周の第二稿への改稿をどのように支えたのかを検討する。周の第二稿の作文を下に示す。

故郷の環境問題
① わが故郷は撫順だ。撫順は中国の東北地区の遼寧に位置する。撫順はふるくて風光明媚な町だけではなく、資源も豊富だ。撫順にはアジアの一番大きな露天的な鉱床がある。長さは66キロメートル、広さは22キロメートルだ。1914年から採掘された。いままでもう80年以上だ。でも、この鉱床は撫順に財産をあげた同時に大きな環境問題もあげた。
② こんな大きな鉱床はこんな長い時間に採掘されたの反面、空気の質量はずっと下がっている。さらに、撫順の鑄鋼工場も粉塵をつくる。だから、空気の中にいろいろな粉塵がたくさんある。数年前に撫順はピンク（ピンク）雪が降ることがあった。その原因は空気の中の粉塵と雪片を混合することだ。鉱床から近いところに道路の両側の木の葉は石炭粉塵に覆われた。雨が降った後、木の葉から黒い水滴は地面に落ちた。
③ 鉱床と鑄鋼工場からの粉塵は環境を破壊するだけではなく、人々の健康も脅かされた。毎日、こんなに汚い空気に生活するの撫順の人々は鼻炎と咽喉（炎）がある人が多い。気管支炎の発病率はほかの町より高い。
④ 新世紀に入った後、環境問題は人間から注目を浴びられる。いろいろな環境を守る措置がとられている。撫順は例外ではない。まず、2007年鉱床の採掘が止まれる。最近、発達しているの技術のおかげで、新しい鑄鋼工場を作られた。粉塵の排出することが有効に抑えられた。今日の撫順はだんだん昔のようにきれいになってくる。それもいつそうあおくなる。
⑤ 今は、撫順の人々の環境を守る意識が増えている。撫順の環境を回復のために、人民がずっと努力している。【原文のまま、（ ）は筆者による注である】

まず第一稿に大幅な修正を加えて第二稿としていることが分かる。改稿への過程で周に大きい転換があったことが推察される。この転換は作文の題目にクリアに示されている。題目は「環境問題に対して私の感想」から「故郷の環境問題」へと変更された。第一稿では、具体的な環境問題をいわば思いつくまま並べ、その一つ一つについて感想を連ねていた。他方、改稿した第二稿では、故郷で起きている環境問題一つに焦点化され、歴史的経緯、構造、住民への影響、市の対策など、多様な観点から論じられ、一貫した論を展開することに成功している。大学生の知的水準を反映した作文となっていると言える。

それでは、周のこのような改稿は先行して行われた事前活動と関係づけて説明できるのだろうか。先に述べた

ように、第二稿を書く前に、事前活動として、グループでは、改稿に向けて個々の作文の修正の方向性や修正の具体的なポイントを互いに出し合う活動が行われている。以下では、週のグループでのやり取りの音声記録を文字化した資料の中から周に関係する箇所を抜き出し、それと第二稿への改稿との関係を検討する。

- 汪01 那你下个作文准备改了吗？（訳：周さんは、作文をどのように直すつもり？）
 周02 我就准备重写了呗。（訳：書き直すつもりだよ。）
 徐03 为什么重写？（訳：どうして書き直すの？）
 汪04 他的就是，那个，感想，多。多。（訳：周さんのはね、ちょっと、あのう、感想が多い。）
 徐05 太多了？（訳：多すぎるの？）
 周06 我为了凑字数，想到哪儿写到哪儿，
 （訳：ぼくは字数を稼ぐために、思いついたことを全部書いたよ。）
 汪07 你看，咱们有这个，空气污染问题可以写，也可以写那个，比如说就是地球温暖化
 （訳：ほら、大気汚染の問題について書けるでしょう。これも書けるね。例えば、地球温暖化のこと。）
 周08 我还是写家乡的环境问题吧。温室效应跟大家都重了。我这个家乡环境问题还写得挺多的。
 （訳：やはり故郷の環境問題について書こうか。温暖化だとみんなとダブっちゃうし、それに故郷の環境問題について結構書いたし。）
 汪09 矿产，然后，工业就是那些重工业，不是吗？重工业之后，不是要排浓烟吗？这是我知道的哈，排浓烟的话，不是很多空气什么的含有污染物，然后，你就可以先写这个污染的原因，源头，然后解决方法，之后写一下感想，然后再写一下你对空气污染，就是得怎么做，得怎么
 （訳：鉱業もあって、工業というのは重工業のことでしょう。重工業は大気汚染につながるね。私の知っている限り、工場の排気があった場合、空気の中になんらかの汚染物が含まれて、それで汚染の原因、その源について書けるでしょう。その後は、解決方法を書いて、自分の感想を書いて、その次は大気汚染をどのようにすればいいか）
 周10 我明白。（訳：それは分かっている。）
 汪11 就这一个写（訳：その中の一つについて書く。）
 周12 我觉得写一点，我就写不了800字。这一点写这些，已经很
 （訳：1点だけに集中して書くと、800字は書けないと思うよ。この点についてこれくらい書けたのはもう限界よ。）
 徐13 我也痛苦死了（訳：私もつらくて死にそうよ。）
 周14 都是一样的。（訳：みんな同じさ）

周の作文に対する苦手意識と具体的な改善方法の提案を軸に検討を進める。前者から見ていくと、周は第一稿を書くに当たってく字数を稼いで800字の原稿用紙のマスを埋めること>を目標としていたことを表明している（周06）。短い段落が脈略なしに並んでいたのは、周が段落の作り方を知らなかったというよりは、ある話題について深く考え、その考えを表出して800字を埋めるという作文を経験していなかったためである可能性がある。この自信のなさは具体的な改善のポイントが仲間から出された後にもなお続けて表明されている（周12）。

次に二つ目のポイントを見てみよう。周の第一稿は感想になっているという指摘がされ（汪04）、感想でないものにすることを改稿の軸に据えることがまず確認された。そして、やり取りを経て、自身の故郷である撫順の環境問題に焦点化することを周は選択する（周08）。この周の下した結論のもとに、作文の具体的なプロットが<鉱業→工業→工場からの排煙→大気汚染→解決策→感想>として提案された（汪09）。この汪の提案に対して、周はそうしたいし、それがいいに決まっているのだが、一つのことだけで800字埋めることができるか心配だとして自信のなさを吐露した（周12）。この周の吐露に対して徐が「私もつらくて死にそうよ。」と言い共感的姿勢を示す（徐13）と、周はそれを受けて、「みんな同じさ」と、自分だけでなく800字埋めることはみんなも苦痛なのだと言い換えている（周14）。ここで、作文が苦手なのは自分だけではなく、みんなが苦手でありみんなが直面している苦しい問題なのだという確認がグループでなされたことが分かる。このことは、作文が書けないという苦手意識を持ち、これまで引け目を感じてきた周が、その劣等感から解放され、自分たちは作文という難題に連帯して向かう仲間なのだという意識を互いに確認しあったものとして捉えることができる。汪の具体的な提案

(注09) を取り入れ論旨の明確な作文へと改稿できた背後には、苦手意識から解放され、作文に対する姿勢が転換したことがあったと言える。

周の作文の改稿の方向性が確認された後、汚染の酷い実態の告発にとどめるか、それとも汚染状況の改善が進んでいることも加えるかをめぐって周と仲間との間でやや白熱したやり取りがあった。

- 周25 现在中国还没有达到那个层次。(訳：中国はまだそこまで進んでいないと思うよ。)
- 徐26 可能我们好多人还不了解。(訳：たぶん私たちはまだよく分からないだけでしょう。)
- 毕27 对啊，国家政策规定了。我知道南方开始改造矿产业了。
(訳：そうよ。国はもう政策を定めたし、南のほうでは鉱業の改造を始めたと聞いた。)
- 周28 那只是意识上的吧，抚顺到现在还没有提高到行动吧？
(訳：それはまだ意識上でしょう。撫順では今まだ行動レベルに達していないようだ。)
- 徐29 其实，虽然抚顺是你家乡，但可能还不太了解吧。
(訳：撫順は周さんの故郷だけど、よく知らない面もきっとあるでしょう。)
- 汪30 嗯，往往你觉得挺了解的。可是，嗯，上网查查。
(訳：そうね。よく分かっているつもりでもね。だから、ネットで故郷のことについて検索したら？)
- 周31 虽然有这个意识，但是在实施方面，感觉特别难。
(訳：意識はあるとしても、実施するのは難しいと思うよ。)
- 毕32 虽然很难，但是我们还是要做啊。在中国，才刚刚开始。
(訳：難しいけど、やらなきゃいけないことだよ。中国では、まだ始まったばかり。)
- 徐33 那这样怎么样，你把前面那部分先那么写下来，然后再写我们政府正在采取的一些环保措施，然后他在把看到的现在的改变写下来就行了吧？
(訳：じゃ、こうするのはどう？前に書いた部分を残しといて、次に政府が環境保護の措置を取っていることを書いて、最後に目に見えた変化について書いてみる。)
- 周34 关键，我还没看到改变。(訳：重要なのは、ぼくはまだ変化を見ていない)
- 徐35 上网查。(訳：ネットで調べるのよ、ネット)
- 汪36 植树造林也是一种啊。(訳：植林運動もその一つよ。)
- 周37 它现在环境变好了，是因为矿被采没了，
(訳：でも、環境がよくなったというのは、炭鉱が採掘されて、石炭がなくなったからだよ。)
- 毕38 那不一定是采没了，嘿，还钻牛角尖呢。
(訳：採掘されてなくなったからとは限らないよ。周さん、頑固だね。)
- 徐39 我在报上看的，用填挖的是没有技术的，不用填挖的都是有技术的，现在不有的是探井下去嘛，就是为了保护环境啊。
(訳：新聞で読んだけど、露天採掘を行ったのは技術がないからで、露天採掘をしないのは技術を持っているってことよ。今は坑内採掘が行なわれているのも環境を守るためよ。)
- 汪40 这个很好查的，你就查一下，抚顺，煤矿什么的就会出来的。
(訳：これは、調べればすぐヒットするよ。撫順、炭鉱というキーワードで検索すれば出てくるはず)

汚染の深刻さだけでなく、それが改善に向かっていることも書くべきだという仲間の意見に対して、周は様々な形で抵抗を示している。例えば、「国はもう政策を定めたし、南のほうでは鉱業の改造を始めた」(毕27)には、「それはまだ意識上でしょう。撫順では今まだ行動レベルに達していない」(周28)と反論し、「じゃ、こうするのはどう？前に書いた部分を残しといて、次に政府が環境保護の措置を取っていることを書いて、最後に目に見えた変化について書いてみる。」(徐33)という助言に対しては、「重要なのは、ぼくはまだ変化を見ていない」(周34)と言って却下しようとしている。また、「環境がよくなったというのは、炭鉱が採掘されて、石炭がなくなったからだよ。」(周37)と言って、政府をはじめ人々の環境保護に対する積極的な働きかけが奏功したためではないと強く主張している。この主張は仲間の「周さん、頑固だね。」(毕38)という半ば呆れたという声を引き出している。

この一連のやり取りから、周が故郷の環境問題を切り口にして如何に考えを深めているのかが伝わってくる。問題の深刻さに対比してその改善が進んでいることを書くというのはバランスのとれた文章の型として一般的に

は推奨される書き方であり、また物事の否定的な側面と肯定的な側面を合わせて考えるというのも期待される思考パターンであろう。しかし、周はそうしたよくある考え方に容易には与せず、自分の生活実感に即して吟味しようとしていると言える。

やり取りは、仲間の一つ一つの意見や助言に対し周が反論する形で続いた。最後に「新聞で読んだけど、露天採掘を行ったのは技術がないからで、露天採掘をしないのは技術を持っているってことよ。今は坑内採掘が行なわれているのも環境を守るためよ。」と新聞の最新報道をもとにした徐（徐39）の発言に続く、「これは、調べればすぐヒットするよ。撫順、炭鉱というキーワードで検索すれば出てくるはず」という汪（汪40）のまとめでこのやり取りは終わった。

このやり取りは周の第二稿に反映されている。第二稿の最後の2段落を再掲する。

④新世紀に入った後、環境問題は人間から注目を浴ばれる。いろいろな環境を守る措置がとられている。撫順は例外ではない。まず、2007年鉱床の採掘が止まれる。最近、発達しているの技術のおかげで、新しい鑄鋼工場を作られた。粉塵の排出することが有効に抑えられた。今日の撫順はだんだん昔のようにきれいになってくる。それもいつそうあおくなる。

⑤今は、撫順の人々の環境を守る意識が増えている。撫順の環境を回復のために、人民がずっと努力している。

段落④は明らかに徐（徐39）の意見がヒントになっている。周は、実際、第二稿の作文を書く前に自分の故郷についてインターネットで調べたと語っている（フォローアップインタビュー）。また、段落⑤から分かるように、改善された結果が既に現実のものになっているとしてではなく、改善に向けて人々の意識が変わり努力が傾注されるようになったとしてまとめられている。仲間との真摯な議論の結果、周が最終的に辿りついた識見が見事に表出されていると考えられる。

6. まとめと今後の課題

本稿では第一稿から第二稿の間に顕著な変化を見せた周さんを取り上げ、この変化と周が取り組んだ複数の事前活動との関係を突き合わせて検討した。結果、第二稿とそれに先行してなされた事前活動（第一稿を対象としたグループでの検討）との間に特に密接な関係があることが分かった。周は第一稿を書くに際してただ原稿用紙のマスを埋めることだけを考えていたことを言葉に出して言い、それに対して仲間から「私もつらくて死にそうよ。」という共感のことばを得ることができた。このことで、周の作文に対するそれまでの劣等意識は払しょくされ、仲間同士の社会的関係の改善に繋がったことが推察された。また、推敲の方向性に対して仲間との間でやり取りを重ねる中で、汚染の実態ばかりでなく、それに対する改善の動きも合わせて書くかどうかを巡って、仲間との間で意見を闘わせたことに見られるように、改稿の焦点は、言語形式ではなく内容自体に絞られていた。言語形式には正解があるが、内容には正解がなく、どこまでも考えを深めることができる。

事前活動が母語の中国語で行われていた点にも注目したい。中国語によるやり取りであったからこそ、自分の作文に対する劣等意識が言語化でき、思いが自由に言えたと考える。そして、周は劣等意識から解放されることができた。また、中国語によるやり取りであったからこそ、自分の既有知識に容易にアクセスでき、その既有知識を活用しながら仲間と意見を闘わせ、考えを深めることができたのであろう。周は自分の故郷撫順について仲間と議論をし、そこで出た疑問をインターネットで検索することで、前よりも自分の故郷のことがよく分かるようになったと語っている（フォローアップインタビュー）。

このことから、周にとっては、作文学習が教室内の学習として完結しないで、自分の人間活動の一環となっており、作文学習が、自分がどのように生きるかという生きる姿勢とも関わり合ってきていることが分かる。つまり、言語活動と人間活動が一体化していると言える。

本稿では、28人の学習者の中から周というただ一人の学習者を取り上げ検討したに過ぎない。全ての学習者が周のように第二稿が大幅に改善されたわけではない。したがって、今回の結果は探索的なものであり、限定的な

ものに留まることを認めなければならない。残りの27名の学習者においても本稿の結論が適用できるかを検討することが必要である。

合わせて、持続可能性日本語作文教育の可能性を確かなものとするためには、食糧や雇用など社会の根幹に関わるテーマを取り上げること、2年生や4年生など学習者の学年を広げること、第一外国語としての日本語だけでなく、第二外国語としての日本語の作文教育にも広げることなどを今後の課題とした。

参考文献

- 岡崎敏雄（2008）「グローバル化の下で変動する世界における言語生態学の課題—持続可能性言語教育原論—」『筑波応用言語学研究』15、筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース、1-14。
- 岡崎敏雄（2009）『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語—』凡人社
- 房賢嬉（2011）「持続可能性音声教育を目指すピア・モニタリング活動の可能性—対話を媒介とした言語生態の保全・育成を通して—」お茶の水女子大学博士論文（未公刊）
- 楊峻（2010）『大学の日本語授業におけるグループワークのデザイン—言語生態学を理論背景とした研究—』外文出版社

註

- i ①～⑦は、筆者が記述のため、後で付け加えた段落の通し番号である。
- ii （ ）内は話題提供者の名前であり、いずれも仮名である。